

〈古島敏雄教授最終講義〉

経済学部長挨拶

望月 清司

ただいまから、内田義彦、古島敏雄両教授の最終講義を開講いたします。それにしても、この大教室によくぞこれだけ集まっていたいただきました。これほど熱心な聴講者を前に、最後の講義をされることは、両教授にとっても忘れがたい思い出となることかと思えます。この点、主催者の側からも聴講のみなさんに心からお礼を申し上げねばなりません。

ご承知のように、両教授は昭和57年度中に70歳の歳を迎えられ、本学の規定によって定年退職されることとなりました。わが経済学部にとりましては、我が国の経済学史学界と日本経済学史界のそれぞれ文字通り第一人者を一挙に失うことになったわけでした、規定上やむを得ないこととは申せ、たいへん残念なことであります。そこで、両教授がこれまで専修大学とわが経済学部のために永年おつき下さいました研究上、教育上のご貢献を長く記念する意味で、最終講義のご開講をお願いしましたところ、お二人とも快よくお引き受け下さいまして、今日このような運びとなった次第であります。

こしばらく大学全体としても最終講義という催しが途絶えていましたので、皆さんにとってはこうした講義形式は珍しく思われるかも知れませんが、実は、経済学部でも15年ほど前に開いたことがあります。ちょうど小林良正、三島一、阿部市五郎の三先生が同じ年に定年になられ、お三人とも最終講義をなさってくださいました。それぞれ長く学界でも本学の教学関係でもご活躍になられた先生がたで、どのご講義も感銘深くうかがった記憶がございます。しかし、この最終講義というのは、あくまでも本人のご意思を尊重するという建前だったものです

目次

経済学部長挨拶	望月 清司 (1)
古島敏雄先生の業績について	加藤幸三郎 (3)
〈最終講義〉	
道と車——近世交通史の一齣——	古島 敏雄 (7)
編集後記	(18)

から、それ以後はなかなか恥かしがり屋の先生が多くて、残念ながら中断を余儀なくされていたものです。それを、こうして盛大な形で復活できましたことは、経済学部にとりましてまたことによるこぼしく、あらためて両教授のご厚情にたいし、感謝の意をあらわしたいと存じます。

とくに本日は、小田切学長、坂本、大熊両理事も一学生として最前列の席についておいでです。他学部の先生方や、学生時代に両教授の講義を聞かれた職員の方がたもいらっやっています。こうした意味でも、今日の催しは、単に一経済学部においてだけでなく、わが大学の中に学問的雰囲気を作り高くもりあげることに変わったわけですし、今さらのようにうれしさを噛みしめている次第です。

内田、古島両教授がそれぞれのお仕事を通じて我が国の学界にどのようなご貢献をなされたかについては、専門を同じくする同僚代表のお二人の先生がたから詳しくお話しがありますので、ここでは申し上げます。

諸君は大学を卒業していずれは社会人となってゆくはずで、研究者の道を歩む少数の人を除けば、大半の人びとはやがて大学で学んだ経済学その他の専門知識を次第に忘れてゆくかも知れません。それはそれでよいのだと思います。大学というところは、個々の学問分野での知識の修得、その時々の実験の分析という仕事をそのつど誠実に果しながら、それを通じて次第に物事を原理にさかのぼって納得するところ、自分の頭で調べる方法を身につけるところであろう、と私は思います。この方法さえしっかりと身につけるならば、たとえ何学を学ぼうと、あなた方は与えられた部署で、あるいは自ら選んだ職場で有能な職業人、よき市民として生きることができるはずで、

今日これからの最終講義では、専修大学の看板教授であられ、我が国第一級の学者でもあられるお二人の先生が、それぞれ一人の人間として、また専門的研究者として社会的分業に参加されてきた方法、まさに人生の方法をじっくりお話しくださると思います。このようなチャンスは滅多にあるものではありません。たとえ諸君がおのおのの学部で学んだことは全部忘れても、1982年12月14日、この大教室の午後に耳にした両教授のお話しは、かりにお話しの全部でなくその一部分、お言葉のひとつかけらであっても、あなたがたの胸の底に焼きついて、これからあなたがたが送る長い人生のなかで、きっといつかは甦り、強いはげまし、よい思い出になると私どもは信じております。

両教授に心からの敬意をお払いする意味でも、どうか最後まで静粛に、耳をそばだてて聴講して下さるようお願いして、主催者がわ代表としてのごあいさつといたします。